

食料・エネルギーの「地産国消」に貢献する

社会情勢の大きな変化、SDGsの潮流の中で、建設業界では「新4K」や「ESS」の取組が焦眉の急となつておらず、地域課題の解決、社会貢献の観点が重要視されつつある。このため、会員各社が関係機関との連携・協力を図りながら行っている食料・エネルギーの「地産国消」の取組を紹介し、地域・社会貢献に関する行政とのパートナーシップの深化を図る。

vol.10

地域に密着し地産国消に貢献する

東急建設株式会社 九州支店 廣瀬 裕一

東急建設株式会社九州支店では、弊社単独あるいは東急グループ各社と協力しながら、福岡市の油山

市民の森の草刈り清掃活動、海の中道の植樹や海岸清掃活動、熊本市での児童養護施設の児童を招いて

市民の森の草刈り清掃活動、海の中道の植樹や海岸清掃活動、熊本市での児童養護施設の児童を招いての映画観賞会開催などさまざまな地域貢献活動を実施している。

農業分野においては、弊社単独で旧玉名干拓施設

(国指定重要文化財)の草刈活動に過年度から継続して参加しているが、令和四年度から地域に一歩足を踏み入れ地域農業の課題に則した活動をスタートさせた。

一つは、熊本市のミカン産地の収穫作業の継続的な支援活動、もう一つは、南阿蘇村で開催した熊本地震復興祈念イベントでの地域農産物のPR販売活動である。本稿において、この二つを地域に密着した地産国消の事例として紹介したい。



ミカン産地の位置

熊本市のミカン産地の収穫作業の継続的な支援

(1) 地域の概要

熊本市の西に金峰山(さんぽうさん)という山がある。その山肌に沿つて通称金峰オレンジ街道と呼ばれる広域農道が走っている。農道から一つ逸れると、車一台がやつと通れるくらいの細い道が急斜面をスイッチバックするかのようにジグザグに巡っている。

一帯は河内(かわち)と呼ばれ、有明海に面して斜面が開け、手積みの美しい石積の段々畑が広がっている。排水が良好で、かつ太陽の光に加えて有明海からの反射光が注ぐ条件下で古くから温州ミカンが盛んに栽培されてい

る。樹園地に足を踏み入れると、五月の連休明けには一面にミカンの白い花が咲き誇り、辺りに広がるその甘く華やかな香りに心癒される。それが、秋の収穫期になると、今度は白から果実の黄色に変化する。それほどこの地域では、ミカンが多く栽培されている。

一説によると、この地域のミカン栽培は約二〇〇

年前に、時の領主が栽培を推奨したのが始まりとされ、昭和三十年代に開園のピークを迎え、現在のミカン園地を形成したと言われている。

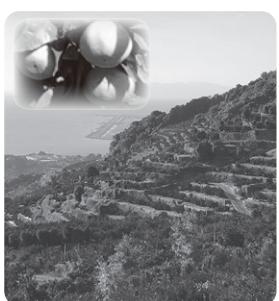
(2) 高機能選果場の整備と残された課題

熊本県のミカンの生産量は、近年、全国の一割以上シェアを占め全国第四位を誇っており、この地域のミカンは「河内のみかん」として全国的にも名を馳せている。

国産の需要が多い中、JA熊本市では、平成十二年に四箇所に分散していた選果場を一ヵ所に統合、さらに平成二十二年には光センサー非破壊選別システムを導入、皮を剥くことなく個々のミカンの酸度や糖度の測定が



統合され最新の選果設備を備えた集荷場



有明海に面して開ける
石積の段々畑

可能な設備を備え、消費者からより信頼されるブランドに前進している。また、出荷先毎のトラックに自動で積み込むシステムを導入し、物流の効率化も図られている。

一方で、課題に目を向けてみると、急峻な地形のため河川水が乏しく重要な防除用水の確保が難しいこと、急傾斜の段々畑であるがゆえに、剪定・防除・施肥などの管理作業や収穫作業が非常に重労働になることが上げられる。加えて、後継者不足、農家の高齢化という全国共通の課題を抱えている。

また、ミカンは比較的貯蔵が効く果物でありながら、生食用としては収穫時期を逃せないという特徴を持つている。収穫が遅れると皮浮きが発生して品質が低下し、ジュースの原料行きとなってしまう。

このような課題がある中で、弊社では、歴史ある貴重な産地を維持し、消費を下支えする支援はできないものかという思いで、令和四年度から収穫作業の支援をスタートさせた。

(3) 支援を必要とする農家との縁組（熊本県“農人ボランティア”）

支援を必要としている農家はいると分かつてはいても、地域との接点が乏しい弊社では農家を見つけるのが難しかった。そこで、目に留まったのが、熊本県が行っている“農人ボランティア”的仕組みであった。

“農人ボランティア”は、農家の高齢化や後継者不足対策の一つとして、熊本県が令和二年度からスタートさせた仕組みである。

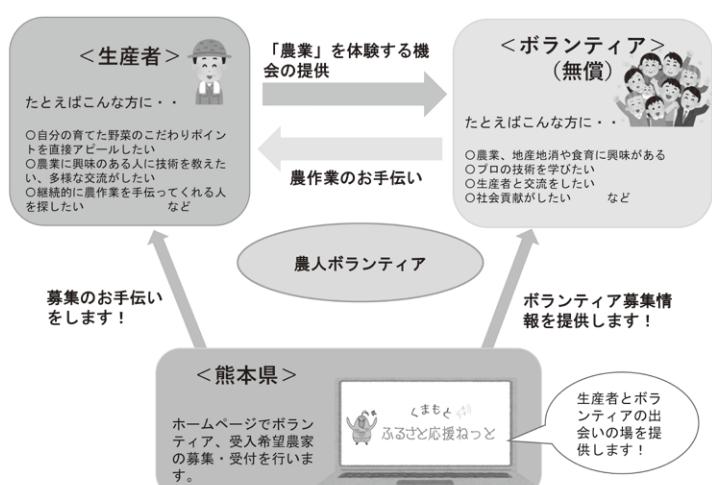
直近では、平成六年十二月に社員六名が参加し収穫作業を支援した。受入農家は、約一haの歴代のミ

録しておくことで、県が条件のマッチする者同士を結びつけてくれる。マッチングが成立したら県から受入農家が紹介され、その後は当事者間で作業内容、準備する物などの詳細な確認を行い支援実施に至る。

参考までに、この“農人ボランティア”は、県のホームページのほか、熊本の民放（テレビくまもと）の「GO！くまもん☆ナビ」でも紹介され、現在、放映内容がYouTubeにもアップされている。

“農人ボランティア”は、農家の高齢化や後継者不足対策の一つとして、熊本県が令和二年度からスタートさせた仕組みである。

また、収穫には、熟練と言わないまでも多少の要領が必要だった。ヘタ部分は、一度枝から切りとり、手元で確認しながら再び短く切り直すよう指導され



た。手間だが、ヘタの未処理が原因で運搬時に他のミカンの皮を傷つけ、そこから雑菌が浸入し保存中に腐ることであった。

(5) 支援の成果

休憩も昼食もミカン園で受入農家と一緒にとつた。話が弾み、栽培管理の大変さ、後継者問題、地域の農業の問題などの話題で盛り上がった。交流が深まることで、生産者への理解や食への関心が高まり、継続的な支援活動として定着したことが一番の成果であった。

さらに、この活動の情報を熊本県内の東急グローブ各社にも共有したところ、グループ会社としての支援に拡大したことも非常に意義深かった。

他方、農家にとっては、アルバイトの確保が難しく、収穫適期も限られる中での支援は非常に助かった、と感謝された。

地域農業が抱える課題の抜本的な解決にはならないにしても、産地を支える一助になつたと確信しており、今後の支援の広がりに期待している。

熊本地震復興祈念イベントでの 地域農産物の販売

(1) 南阿蘇村の熊本地震被害

平成二十八年四月十四日、熊本地方でマグニチュード六・五の地震が発生、さらに、十六日にはマグニチュード七・三の本震が襲い最大震度七を記録した。南阿蘇村（以下「村」という。）では、強い揺れとともに大規模な斜面崩壊が村の各所を襲つた。崩壊土砂は、大動脈の国道五七号線を寸断し阿

蘇大橋を飲み込み、河陽地区では住宅団地を襲い多数の死傷者を出した。被害は、村全体で三一名の尊い命が失われ、家屋被害は半壊以上が一六〇〇棟を超えた。交通インフラ被害、ライフライン被害、農地や農業用施設への被害も甚大であったことは想像に容易い。主要な産業である観光業にも大きな打撃を与えた。

(2) 熊本地震復興イベントを開催

阿蘇大橋の落橋箇所に程近い所に弊社のグループ会社である「阿蘇東急ゴルフクラブ」（以下「ゴルフ場」という。）がある。ゴルフ場もクラブハウスの全損、コースや駐車場には一mを超す段差の地割れが発生するなど大きな被害が発生した。約二年間の閉鎖に追い込まれたが、復旧の過程では地域からの多くの助けをもらい、ようやく平成三十年七月に全面営業再開にこぎつけた。

この営業再開をきっかけに、地元への感謝と地震



1mを超える段差の発生とクラブハウスの全損



復興イベント「阿蘇東急でアソぼう♪」

からの復興を祈念して何かやろうということで、村とも相談した結果、弊社を含む東急グループ各社で協力して、復興したゴルフ場を会場に、地震発生の毎年四月、復興イベント「阿蘇東急でアソぼう♪」を開催することになった。令和元年度に初回を開催し、コロナ禍で開催を見合せた年もあったが、令和五年までに四回開催している。

イベントでは、ゴルフ場を終日無料で開放し、村の復興状況のパネル展示（国土交通省協力）、警察・消防や自衛隊による防災特殊車両などの展示、ゴルフコースを一般開放し、草スキー、ミニ動物園、ツリーイング*や県出身の元Jリーガーを呼んでのサッカー教室など、家族が終日楽しめる催しを行い、多い年には約四千人が来場した。

*木に吊るしたロープを登る遊び

(3) 南阿蘇村と地域農産物の消費拡大に向けた連携協定を締結

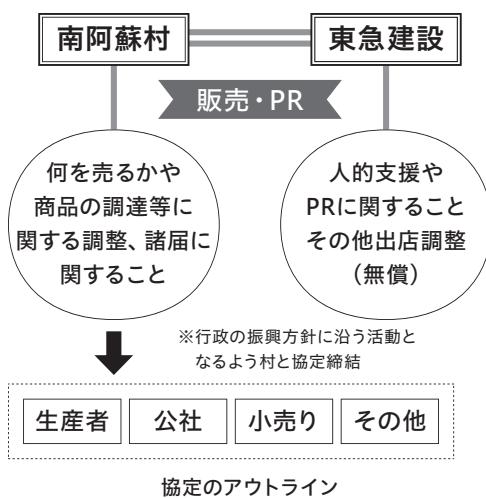
イベントを重ねる中で、地震からの復興の歩みを皆で教訓として確認することに加え、地元をより盛り上げていく試みは出来ないかという声も聞こえた。これを踏まえ、令和五年三月、弊社と村で「地域農産物の消費拡大に向けた連携協定」を結び、農業の復興を後押しすることとなった。行政の振興方針に沿う形の活動が一番良いと考え、村との協定締結を選択した。

協定は、何をPRし消費拡大に繋げたいかは村の意向が最大限反映させられるような仕組みにしてしまうよという内容である。また、取り組む案件毎に生じる細かな決め事は、別に覚書を結び対応するようとした。

(4) 熊本地震復興イベントで地域農産物を販売

協定の第一段の取り組みとして、前記で紹介した

消費拡大連携



協定のアウトライン



PR販売する弊社社員と村の職員



アスパラと小分けした食べ比べ米



イチゴ味のポップコーンなど加工品の品々

復興イベント「阿蘇東急でアソぼう♪」で、地域で採れる農産物や加工品をPR販売することになった。村と協力して出店した店舗の名は「南阿蘇みのもと」である。

流行りのキッチンカーの出店がある中で、農産物を売る店として異色を放ったのか、「アスパラガス」、その場で焼いて提供した「焼きアスパラガス」、南阿蘇産米の「おにぎり」が特に好評で完売した。

阿蘇の大自然を満喫できる中で、村外からの来場所が多いイベントで、地域の農産物等を直に見せて販売することで非常に大きなPR効果を上げられたのではないかと、買う人の表情、食べる人の笑顔から手応えを感じた。

ミカンの収穫支援については、生産者との交流で得るものが多くなった。今も生産者と定期的に情報交換を行っており、今後も支援を継続させる予定である。なお、本年度からは、ミカンの収穫支援に加えて、熊本市のスイカ産地の収穫・出荷の支援も開始した。スイカは重量野菜で、高齢農家には大きな課題となっている。

南阿蘇村の農産物の販売については、会場のゴルフ場が経営譲渡の関係から、令和六年度はイベント自体が開催できず活動が叶わなかった。今、村では農業公社を中心に、耕作されていない農地を特産物のオーナー制に活用するなど、懸命な地域おこしが行われており、協定を活かした効果的な活動を村と相談しているところである。

ン、生姜シロップ、味噌などを販売した。加工品の材料はもちろん南阿蘇村産である。

(5) 支援の成果